

伊周「三月三日、侍宴同賦間柳発紅桃、応製」の漢詩をめぐる

渦 卷 惠

一 はじめに

藤原伊周は、中関白道隆を父、高階貴子を母として、天延二（九七四）年に生まれ、父の引き立てのもと、正暦五（九九四）年に叔父道長らを超えて、二十一歳で内大臣となった。しかし、翌長徳元（九九五）年四月に道隆が没すると、天皇生母である東三条院藤原詮子の推挙により道長が内覧となり、伊周と道長の対立が深まる中で、長徳二年、花山院に矢を射かけた事件を契機に、大宰権帥に左遷される。翌三年三月の大赦により罪を免ぜられ、十二月に帰京。長保二（一〇〇一）年本位に復し、寛弘五（一〇〇八）年准大臣、同六年正月正二位となったことにより、准大臣の唐名、儀同三司と称される。政治的権力を持つことはないまま、七年正月二十八日に三十七歳で没した。

漢詩文に秀でており、一条天皇の作文の師であったことは、

『枕草子』「大納言殿まゐりたまひて」などにも記されている。尾原久子「儀同三司小考」によると、現存する漢詩は二十五編。年代のわかる最も古い作品は、正暦三（九九二）年三月「賦飛州高吏君赴任詩」（本朝麗藻巻下 餞別部）。以後、長保寛弘期に内裏や道長邸で頻繁に催された詩会においても数々の詩を残し、かつての政敵である道長とも詩を詠み交わしている。

さて、伊周や定子の母方の伯父に当たる高階積善が編纂した『本朝麗藻』の冒頭には、次の詩が配される。

三月三日、侍宴同賦間柳発紅桃、応製。以春為韻。

儀同三司

三日花朝和暖辰 紅桃間柳発粧新  
烟濃纔透緩山月 黛動半蔵曲水春  
碧玉簾中裁錦妓 青羅帳後拏燈人

『本朝麗藻』は寛弘六(一〇〇五)〜七年頃に成立したとされる。もっとも多く詩がとられたのは大江以言で十九編序七編。以言は伊周の家司的な役割を果たしていたと考えられている。次が具平親王。伊周が三番目に多く十五編が載る。積善自身は、詩五編序二編を入集。

積善は、内裏(一条天皇)や左府(藤原道長)主権の作文会にしばしば招かれ、『本朝文粹』『類聚句題抄』などに併せて十数首の漢詩を残す一条朝の代表的な詩人の一人である。しかし、中関白家の没落の中、文才を認められながらも、文壇の中心足り得なかつたようである。

長徳二(九九六)年一月、伊周と弟の隆家の配流に伴い、積善の兄弟、高階信順は伊豆権守に、道順は淡路権守に左遷される。定子らの母である高階貴子は、嘆きのうちに病死した。『栄花物語』には、事件について、母、貴子や定子の悲しみを絡めて詳述されている。

伊周が詠んだとされる、  
物思ふ心の闇し暗ければ明石の浦もかひなかりけり(栄花物語・裏裏の別れ)

の歌は、『宝物集』にも見出せ、定子の歌、

儀同三司の速き所に侍りけるにつかはされける

一条院皇后宮

雲の波煙の波のたちへだてあひ見んことの難くもあるかな(統古今集・離別、八三五)

も残る。『拾遺集』には、伊周とともに都を離れる家司の歌が採られる。

帥伊周、筑紫へまかりけるに、川尻はなれ侍りける  
によみ侍りける 弓削嘉言

思ひいでもなきふるさとの山なれどかくれゆくはたあはれなりけり(拾遺集・別、三五〇/金葉集三奏本、五二八。詞花集、三九一では、兄の正言の歌として入集)

政権の中心から大きく離れた高階家にとって、残された希望は、定子の生んだ皇子、敦康親王である。しかし、周囲の眼は冷たかつた。積善の献じた序は、次のように評される。

また、云はく、「高積善、式部卿宮敦康において序を作る。自謙の句に云はく、海西白茅の秋、独り外家夙夜の遺老と為ると。時の人、その外戚と為すを嘲弄すと云々」(江談抄・第六)

『本朝麗藻』が、伊周や、伊周に近しく仕えた大江以言の詩を多く採るのは、没落した高階家の家集を後代に残すという目的があったからと考えられよう。その冒頭を飾る伊周の当該詩は、編者の思い入れの詩であった可能性が高い。

## 二 詩の内容

そこで、当該詩の内容について検討していくことにする。

題の「三月三日」は、上巳の節日である。『養老律令』『雑令』第四十条には、「凡正月一日。七日。十六日。三月三日。五月五日。七月七日。十一月大嘗日。皆為節日」とあり、古くから節日とされて、公宴が催されてきた。『日本書紀』顕宗天皇元年三月上巳に「幸後苑、曲水宴」とあり、古くは三月の上巳に曲水の宴が行われていたが、中国の魏の時代に、三日に行うことに改められたのに倣い、日本でも文武天皇五年以降は、三月三日に行われるようになった。最も古い漢詩集『懷風藻』には、曲水の詩が三編見出せる。菅原道真『菅家文草』巻五の「三月三日、同賦花時天似醉、心製」の詩序に、春之暮月、月之三朝。天醉于花、桃李盛也。我君一日之澤、万機之餘、曲水雖遥、遺塵雖絶、書巴字而知地勢、思魏文以翫風流。蓋志之所之、謹上小序云尔。

とあるように、桃李の花盛りに君主が一日水辺に逍遙し、中国の魏代に思いを寄せて風流を楽しんだことがわかる。

二句目「紅桃間柳発粧新」では、桃の紅に混じって、柳が新緑の葉をそよがせる景が詠まれる。

三月三日が桃の節句であったことは、次の例などからわかる。

### 三月三日付桃

春来遍是桃花水 不弁仙源何処尋 (和漢朗詠集、三八)

王維)

三月三日、節供など物したるを、人なくてさうざうしと

て、この人々、かしこの侍ひに、かう書きてやるめり。たはぶれに

桃の花すき物どもを西王がそのわたりまでたづねにぞやる (蜻蛉日記、中巻、安和二年)

三月三日、桃の花咲きたるを人折れり

三千年になるてふ桃の花ざかり折りてかざさむ君がたぐひに (落窪物語)

三月三日、桃の花をご覧じて

三千世へてなりけるものをなぞてかはもとしもはた名づけそめけむ (後拾遺集・春下、一一八 花山院)

隣りより三月三日に人の桃の花を乞ひたるに

桃の花宿にたてればあるじさへすける物とや人の見るらむ (後拾遺集・雑六俳諧歌、一一〇二 大江嘉言)

また、柳も三月三日の節句に関わる素材であった。中国の詩文では主に桃花に加え、楊柳が取り上げられる。

許曼麗「楊柳小考」柳の民族、中日比較の視点から<sup>1)</sup>は、術曰。正月且取楊枝著戸上。百鬼不入家 (齊民要術)

清明息寒食、又曰禁烟節。古人最重之、今人不為節、但兒童戴柳祭掃埃塋而已。〈中略〉至清明戴柳者、乃唐高

宗三月三日祓禊於渭陽、賜羣臣柳圈各一、謂戴之可免蠱毒。今蓋師其遺意也 (燕京歲時記)

などの例を挙げ、中国において柳が厄を祓うために用いられたこと、三月三日に柳を戴く呪術的信仰が流行した可能性を

示す。

工藤重矩「三月三日の柳―枕草子六段の翁丸はなぜ柳のか  
づらをしたか<sup>(3)</sup>」には、冬至の翌日から数えて百五日目の節  
日「寒食」にかまどの火を消して冷たいものを食べ、新たに  
「清明」に榆柳の枝で火を採る風習を踏まえた表現として、

今日雨中榆柳樹 縦雖鑽過不成烟 (田氏家集・卷下 菅  
家寒食第三晨宴遇雨、同賦烟字)

天悠子推嫌举火 柳烟桃焰雨中消 (菅家文章・卷一 陪  
寒食宴、雨中即時、各分一字得朝)

を挙げる。また、『万葉集』に、

三月三日大伴宿祢家持 七言晚春三日遊覽一首并序  
上巳名辰暮春麗景、桃花昭險以分紅柳色含翠而競緑、  
于時也携手曠望江河之畔訪酒迴過野客之家、既而也  
琴樽得性蘭契和光、嗟乎今日所恨德星已少歟、若不  
扣寂含章何以據逍遙之趣、忽課短筆聊勒四韻云尔

余春媚日宜怜賞 上巳風光足覽遊 柳陌臨江縹絳服  
桃源通海泛仙舟 雲疊酌桂三清湛 羽爵催人九曲流  
縱醉陶心忘彼我 酪酌無処不淹留 (万葉集・卷十七、  
三九九五 大伴池主)

と、桃の紅と柳の緑が並び詠まれる景は、伊周の当該詩句の  
表現に継承されている。

第三句の「綏山」は、中国四川省、峨眉山の西南にある高  
い山のこと。大江匡衡の漢詩「暮春 応制 勒毫高阜桃毛叨

刀陶」(日本漢詩集、一八一)にも「我投綏山盤上桃」とあ  
る。四句の「黛」は、

塵滓之郷去迢々些、城中聖些、空黛色 (経国集・二三  
良岑安世)

青柳の葛城かけて霞むなり山は緑の春のまゆずみ (夫  
木抄・春二、五〇八 藤原為頭)

とあるように、眉墨を刷いたような霞をいう。霞が曲水の春  
の景を半ば覆い隠す様子。

注目されるのは、第五、六句「碧玉簾中裁錦妓 青羅帳後  
举燈人」の表現である。

五句「裁錦妓」について、今浜通隆『本朝麗藻全注釈』<sup>(5)</sup>「  
(以下『全注釈』と略す)は、「ここでは麗しい女性の意。  
『華嚴経音義』へ上」に、「妓、美女也」とある。ここでは后  
妃を指示する」とし、川口久雄・本朝麗藻を読む会編『本朝  
麗藻簡注』(以下、『簡注』と略す)は、「錦衣装の舞姫」と

する。「碧玉簾中」、すなわち御簾の中にいる女性をいうので  
あれば、中宮を指すことになろう。天皇は一条天皇。「裁錦  
妓」は、中宮定子か彰子かのどちらかということになる。本  
来「妓」は、舞姫のこと。『白氏文集』卷十四「上巳日恩賜  
曲江宴會即事」に「花低羞艶妓 鶯散讓清歌」とあり、『本  
朝文粹』卷十一の菅原文時の詩に「于時妓舞粧楼 鳥譚禁樹  
嬌声出花柳之露 妙韻入管弦之風」とある。

定子にせよ彰子にせよ、天皇の后を舞姫に例えるのは、い

ささか不遜な表現に思われるが、この詩が中関白家隆盛の頃に作られたものであるとすれば、妹に対する表現として許容できよう。しかし、伊周が失脚した後、道長の温情により昇殿を許された時期のものとするれば、彰子を「妓」と例えるのはあり得ない表現だ。成立年次については、後述することとする。

「挙燈人」については、『全注釈』が「中古、三月三日、九月九日に北辰（北極星）をまつて運勢を守り、不祥を退けたが、その行事の時に捧げる燈火を御燈といった。天皇みづからが精進潔斎をして行なった。それ故、ここの「挙燈人」とは、三月三日の当日に御燈を捧げられた天皇自身のこと」と指摘する。

仁和元（八八五）年、藤原基経の撰上により清涼殿に掲示された「年中行事御障子文」に、「（三月）三日。御燈事。」とあり、宮中の儀式儀礼の一つであったことがわかる。

「御燈」については、金指正三『我國に於ける星の信仰』、同『星占い星祭り』に詳しい。金指は、『日本紀略』『三代実録』『小右記』『本朝世紀』『江家次第』『北山抄』『小野宮年中行事抄』『九條年中行事』などの古記録類から、「御燈」の儀式的概要について考察し、「御燈祭年表」を作成した。もとは民間の北辰信仰によるものが、宮中行事になり、通常は三月、九月の春秋二回行われたようである。天皇は精進潔斎をして、河原で御祓を執り行い、その後「奉燈御拝の儀」

が行われる。穢ある時には、宮中や河原で祓いのみを行ったようである。『西宮記』三には、

三日御燈、三日、大裏潔斎、宮主奉御卜、申不浄由、不  
可被奉御燈、……御禊如常、無不浄時、内蔵寮奉御燈於  
靈巖寺

とあり、三日に天皇が潔斎をし、御卜の後、不浄がない時には靈巖寺において御燈を奉ったとある。不浄がある時には、御燈を取りやめてその由を申し、不浄を祓う「祓え」が行われた。三橋正『平安時代の信仰と宗教儀礼』には、御燈が「天皇個人の儀としての性格を強く持っていた」ものの、行事が貴族に広がる中で、「北辰信仰」の意義は薄れて形骸化され、実資・道長の時代には「祓い」にその意義を置くようになったことが指摘されている。伊周の当該詩の「挙燈人」は、次の句に「震遊」、すなわち天皇の遊びとあることから、「御燈を奉る天皇」の意であることは間違いないであろう。

第七句「震遊如舊群臣醉」について、『全注釈』は「作者・伊周が本詩を詠じた年の、その内裏での曲水の宴も、「震遊如旧」とあるからには例年の通りに晴れやかなものであったに違いない。その遊宴に、「群臣」の一人として参列を許され、心から酒に酔い、詩を詠じ、歌をうたっているのである。当日の作者の颯爽としてみごとな姿を十分に想像することができる」とし、『簡注』は「天徳や康保の昔のようにの意か」と注す。ちなみに、「天徳」は小野好古が大宰府で曲

水の宴をはじめたと伝えられる時期。「康保」は村上天皇が曲水の宴を康保三年に復活させたためであろう。

結びの「魏代塵」については、『全注釈』は『宋書』へ巻一五「志第五・礼二」に、「魏ヨリ以後、但ダ三日ヲ用イ、巳（上巳・第一ノ巳日）ヲ以テセザルナリ。魏ノ明帝、天淵地ノ南ニ流杯ヲ石溝ニ設ケ、群臣ヲ燕ス」とあり、三國魏（二二〇—二六五）の時から、曲水の宴が三月上巳ではなく、三月三日に行われるようになったと言っている。恐らく、ここではこの事を指すのであろう」として、先に挙げた『菅家文草』の「思魏文以翫風流」を引用する。

『新撰朗詠集』にも、

周旦古風伝暎水 魏年昔浪寄春苔（新撰朗詠集・上・春、三九 大江匡房）

とあり、三月三日の曲水宴が、周公旦と、魏の明帝を起源としたと解されていたことがわかる。

谷知子『『六百番歌合』「三月三日」題と曲水宴』は、寛弘四年三月三日の詩、

昔成王之叔父周公旦 卜洛陽而濫觴

今聖主之親舅左丞相 宅洛陽而宴飲（寛弘四年三月三日

新撰朗詠集・上・春、三四序 大江匡衡）

を引き、「周公旦は、兄武王の子成王の摂政となつて助け、周王朝を治めた人である。道長も外戚、撰闋家（撰政となるのは後年で、しかもわずか一年間であるが、撰闋家としての

意識という意味）という立場にあり、共に王の叔父、祖父という血縁者として幼い王を補佐するという共通点を持つことが明確に意識されているのだ。古今東西の違いを越え、曲水宴という業を通じて、王の外戚、撰闋家という共通点を持つ周公旦と道長が重ねられている点に注目しておきたい」と論じる。「昔成王之叔父周公旦」と「今聖主之親舅左丞相」は対を成す。

伊周の当該詩も「魏代塵」とかつての中国での発祥を挙げて、天皇のめでたさや長久を寿ぎ、臣下としてそれを補佐する喜びを詠む点で、似た趣向である。

以上、まとめると、当該詩は、上巳の節句の桃と柳によって春の景色の美しさをたたえ、後半は人事に展開する。天皇みずからが精進齋をして行なう御燈を詠み、後の美しさを讃え、その臣下として仕える喜びをいい、最後に上巳の節句の発祥、中国の魏代に思いをはせている、という内容になる。

### 三 詠作時期について

さて、前述の「妓」が定子を指すか、彰子を指すかを認定するために、詩の成立時期について考えたい。

『全注釈』は、「父の関白・道隆の死（長徳元年・その当時、伊周二十二歳）が内大臣正三位の伊周の将来を完全に打ち砕くのであるが、この詩は、それ以前のものではないだろうか。父や妹の存在が作者の輝かしい前途を約束していてくれる。

そうした安心感、満ちあふれる期待感の中で、例えば、「帝（一条帝）、皇后宮（定子）をねんごろにときめかせたまふゆかりに、帥殿（伊周）はあけくれ御前にさぶらはせたまひて」『大鏡』「道長」伝とあるような状態の中で、作者はこの詩をつくったのではないだろうか。内容的にはそのように思える。（略）また、逆に、父の道隆の死後、或いは妹の定子の死後、（定子の死は長保二年・その当時、伊周は二十七歳）の作、例えば、「星の落ちて石となるにぞ例ふべきや。それこそ返りあがることなけれ」『大鏡』「道長」伝と言われるほどの、逆境にあった頃の伊周の作とも考えられる。そうだとすると、言うまでもなく、「裁錦妓」は中宮・彰子ということになり、作者のその賞揚の言葉は、鬱屈した、複雑な心情を反映した皮肉なものと考えざるを得なくなる」とする。

一方、『簡注』は、『本朝麗藻』の成立を寛弘八年以前とし、古記録に見える寛弘元年、二年の上巳の節会のうち、元年の詩題にないため、寛弘二年か、と推定する。

そこで、定子関連の年次をまとめると次のようになる。なお、成立に関する項に傍線を付し、適宜参考文献を挙げた。

正暦元（九八九）年一月、定子一条帝に入内。  
同三年三月、「贈飛州高使君赴任」（本朝麗藻）を作詩（五島和代「伊周と文芸」）。

同四年、清少納言、出仕。

正暦年間 「右相府白川亭」（新撰朗詠集 山家）、「大極殿朝拜詩」（和漢朗詠集 雑 帝王）、「秋日遊 栖霞寺」（新撰朗詠集 山寺）を作詩（尾原（一）論文）。

同五年二月 積善寺供養。八月、伊周が二一歳で道長ら三人を超えて内大臣になる。

長徳元（九九五）年四月道隆薨去。伊周漢詩このころ以前か（全注釈）。五月、道長が伊周を越えて右大臣、及び氏長者になる。

長徳二（九九六）年一月、伊周らが花山院に矢を射かけたことを発端に、内大臣伊周を大宰権帥に、中納言隆家を出雲権守に貶める宣旨が四月に下される。配流決定後に定子の邸から逃亡、戻ったところを捕えられる。母貴子が重病と知り、配流先からひそかに入京、露見して捕えられる。定子は自ら銕を取って落飾。十月貴子薨す。十二月に定子、第一皇女となる脩子内親王を出産。

長徳三年、三月、詮子御惱により大赦の宣旨。五月に隆家、十二月に伊周帰洛。

長保元（九九九）年八月、定子は平生昌邸へ行啓、その日道長は公卿を連れ宇治にて遊覧。十一月七日、敦康親王を出産、同日に彰子が女御となる。

長保二年正月二十八日 彰子が立后。朝儀が二月二十五日に行われる。

同三月三日 宮中において上巳の行事が行われ、行成が犬

翁まろに道化した扮装をさせて人目を引く(本稿四章)。

同三月二十七日、定子の三条宮行啓までの間に翁まろが帝の猫を追う事件が起きる。

同十二月十六日、定子、第二皇女・媛子内親王を出産した後  
に崩御。

寛弘二(一〇〇五)年二月二十五日、伊周、大臣の下、大納言  
の上の席次。三月二十六日、昇殿許可。伊周漢詩この年に  
詠作(簡注)、寛弘年間(尾原(一)論文)。

寛弘三年三月四日、東三条第詩会(応制) 題「度水落花舞」  
伊周の詩は「麗藻」一三番。

寛弘四年三月三日、土御門第詩会 題「因流泛酒」  
寛弘五年正月十五日 伊周准大臣。二月八日、花山院崩御。

『御堂関白記』『権記』『小右記』に上巳節供の記事なし。  
九月十一日、彰子が一条天皇の第二皇子敦成親王を産む。

伊周は道長に謁談を拒否される。伊周、和歌序を執筆(大  
鏡)。

寛弘六年一月、彰子、敦成、道長呪詛露見、二月、伊周、朝  
參停止。

同七月以前『本朝麗藻』成立(林古溪『本朝麗藻雑記』)。  
寛弘七年一月、伊周薨ず。『本朝麗藻』成立(川口久雄『平

安朝日本漢文学史の研究』)。

伊周の詩に「応制」とあることから、詠作時期は、失脚し

た長徳二年から昇殿が許可される以前の寛弘二年三月でない  
ことは明らかだ。寛弘三年、四年は、詩題が異なる。寛弘五  
年は花山院崩御の直後で、詩会開催の記録は見られない。寛  
弘六年は朝參停止の時期に当たる。

「裁錦妓」は「举燈人」帝の対なので、定子か彰子とい  
うことになる。伊周が彰子を「妓」と例えるのは、こうし  
た中関白家の没落を鑑みると、不遜である。七句目「震遊如  
舊」の「舊」は、定子生前の昔と誤解されかねない。また、  
落飾した定子を「妓」と表現するのも不審だ。

すると、必然的に長徳元年以前の作ということになる。  
『日本記略』『本朝世紀』には、正暦二年のみ記録がないが、  
「御燈」は、毎年行われていたようだ。『江家次第』巻六にそ  
の作法などがくわしく記録されている。

さて、『大鏡』には、次のように長徳元(九九五)年の上  
巳の祓いの記事を見出せる。

三月巳の日の祓に、やがて造遥し給ふとて、帥殿、河原  
にさるべき人々あまた具して出でさせ給へり。平張ども  
あまたうちわたしたる御座し所に、入道殿も出でさせ給  
へる、御車を近くやれば、「便なきこと。かくなせそ。

やりのけよ」と仰せられけるを、なにがし丸といひし御  
車副の、「何事宣ふ殿にかあらむ。かくきこし給へれば、  
この殿は不運には御座するぞかし。わざはひや、わざは  
ひや」とて、いたく御車牛をうちて、いまま少し平張のも



と近くこそ、つかうまつり寄せたりけれ。「辛うもこの男にいれぬるかな」とぞ仰せられる。さて、その御車副をば、いみじうたくせさせ給ひ、御かへりみありしは。斯様のことにて、この殿たちの御中いとあしかりき。(大鏡 道長伝)

伊周が、道隆の後継として中関白家を牽引しているという気概に満ちた、勢い盛んなころの記事である。河原で上巳の祓いをするために平張を張り渡した所へ、道長の車があとから到着する。伊周側から退くように言われたものの、車副の男が強気に反発する。道長はその車副をかわいがったということだ、というエピソードである。長徳元年三月は、道長が年下の伊周に出世を追い越されてほぞをかむ思いでいたころである。こうした傍若無人な振る舞いを鑑みると、中宮定子を「妓」に準えるのも納得できる。

そして、必要以上に道長側の不評を買ったせいで、失脚後は、その文才さえも嘲笑の対象となってしまう。

彰子の子、敦成の誕生に際しては、次のような話もある。<sup>(6)</sup>  
帥殿はこの内の生まれさせたまへりし七夜に、和歌の序代書かせたまへりしぞ、なかなか心なきことやな。本体はまゐらせたまふまじきを、それにさし出でたまふより、多くの人の目をつけたてまつりて、「いかに思すらむ」「なにせむにまゐりたまへるぞ」とのみ、まもられたまふ。いとはしたなきことにはあらずや。それに、例の入

道殿はまことにすさまじからずもてなしきこえさせたまへるかひありて、憎さは、めでたくこそ書きたまへりけれ。当座の御おもては優にて、それにぞ人々ゆるし申したまひける。(大鏡 道隆伝 寛弘五年)

以上を鑑みると、伊周の当該詩の成立は、道長を追い抜いて内大臣となり、帝や中宮の補佐役を自認していた正暦五年八月から、失脚する長徳二年一月までの間、すなわち長徳元年三月の成立の可能性が高いように思われる。

#### 四 『枕草子』との関連

『枕草子』に、

正月一日、三月三日は、いとづららかなる。五月五日は、曇りくらしたる……(正月一日、三月三日は)

三月三日は、うらうらとのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。柳などをかしきこそさらなれ、それもまだまゆにこもりたるはをかし。ひろごりたるは、うたてぞ見ゆる。おもしろく咲きたる桜(富岡家旧藏能因本「梅」)を長く折りて、大きな瓶にさしたるこそ、をかしけれ。桜(富岡家旧藏能因本「梅」)の直衣に出桂して、まらうどにもあれ御せうとの君達にても、そこ近くゐる物などうち言ひたる、いとをかし。(正月一日は)とあり、兩章段とも、三月三日がうらかな春の陽気の節日であることを趣きある風情とする点が注目される。

萩谷朴『枕草子解環』<sup>(16)</sup>は、「正月一日は」の段に、三月三日、桃、柳、桜が並ぶことについて、

①三月上巳節供の「ころほひ」

②桃の花の咲き始める「ころほひ」

③柳の花の咲き始める「ころほひ」

④桜花爛漫たる「ころほひ」

と分割して解し、枕草子研究会編『枕草子大事典』<sup>(17)</sup>にも、「三月は桃から始まり、柳・桜と自然美が移っていく。この短い部分に「をかし」が四度も用いられているのも、この好節に愛着を持っている証であろう。『事文類聚』に、「桃華王潤ニ生ジ、柳葉全溝ニ暗シ」と中国でも、三月の景物として桃花と柳葉を詩っている。漢詩文の教養美からいっても、王朝人たちは、桃・柳を愛したのでろう」という指摘がある。しかし、三日の節日と柳の取り合わせが中国の寒食節の取り合わせであることを考えると、分割せず、三日のことに含めて解することもできそうである。

『全注釈』は、当該詩の表現と『枕草子』の表現を次のように並べ、「両者の共通点が大いに注目される」と指摘する。三日花朝和暖辰↓三月三日は、うらうらとのどかに照りたる。

紅桃間柳発粧新↓桃の花の今咲きはじむる。柳などをかきこそさらなれ。それもまだまゆにこもりたるはをかし。

「柳」は、『枕草子』内に六か所見られる。うち、「柳筈」が一例。襲の「柳」が一例。「遠つ近江の浜柳」という古歌の引用が一例。「なまめかしきもの」の段には「柳の萌え出でたるに、青き薄様に書きたる文付けたる」とある。あとの二例は、先の「正月一日は」の三月三日、桃、柳が並ぶ例と、後述する「上にさぶらふ御猫は」で、三月三日に、犬の頭に飾った「柳のかずら」である。春の柳そのものについての叙述はこの部分のみで、物尽くしの章段に「柳」は採り上げられていないのである。したがって、伊周の当該詩と『枕草子』のこの章段の表現の表現の共通性は、きわめて興味深く思われる。

さて、『枕草子』には、上巳の日について、次の場面が描かれている。

あはれ、いみじくゆるぎ歩きつるものを。三月三日、頭の弁の柳のかづらをせさせ、桃の花をかざしにさせ、桜（学智院大学蔵・富岡家旧蔵能因本「梅」）腰にさしなどして、歩かせ給ひしをり、かかる目見んとは思はざりけむ」などあはれがる。（上にさぶらふ御猫は）

この章段は、宮中で飼っていた翁まろという犬が帝の猫を追い、朝餉の間に走り込んで、帝の怒りを買ったために犬島流しを命じられ、ひどく打擲されるという話である。ひどく打たれたのに宮中に戻ってくる犬を見て、清少納言は数日前の上巳の節句の際の、犬の晴れ姿を思い出す。その際に、翁

まるは、柳の蔓と桃の枝を頭につけ、腰には桜の枝を飾りに結び付けられて、得意そうに歩いていたのであった。

萩谷『枕草子解環』は、伊周の詩の素材と合致することから、「これは、偶然の一致であるかも知れないが、春三月の季趣として、清少納言の美意識の中には、随想にもせよ回想にもせよ、必然的に表象されるほど身についていたものともいえよう」「ころほひ」を随想したところに、三日・桃・柳・桜とあった季題と偶然にも全く一致するが、三月三日に、柳の枝で作った髪飾りを翁丸にかぶせ、そこへ桃の花を髪飾りとして挿し、腰の帯革には桜の枝を挿すといった趣向で、東遊の舞人の姿にでも見立てたのであろう」と指摘する。

金子元臣『枕草子評釈』<sup>18</sup>にも、「遊宴の際、時の花を蘂葛にし、挿頭にかざすことは、古来の習俗であった。上巳曲水の佳節に、翁丸が柳の葛桃の挿頭は、頭辨が私の思付のみではあるまい。鰩犬として、主上の引かせられた御趣向であらう……藏人頭従四位上右大辨行成朝臣ともあらう人が、小さな小供じみた戯をしたのも、時代がさうした、悠悠閑々たる、無事な時代であつた事を證明する」とある。

津島知明『背景』を迎え撃つ『枕草子』——「生昌段」「翁丸段」から——は、この翁まるの飾りについて、「立後の儀から間もない「三月三日」、最大の功労者たる藤原行成の、記念すべき初登場シーンである。「柳かづら」に「桃の花」「桜」まで加えて、過剰なまでのパフォーマンスで翁丸に衆

目を集める行成。心の内を付度されることを、自身に向けられる視線を、ナチュラルに避けるかのように、権記を經由して枕草子に向かう時、彼の横顔はたかぶる陰影を刻まずにおかない」と、意図的なパフォーマンスであったと論じている。前述のように、上巳の節句に、桃と柳はしかるべく必要なのであった。さらにそこに桜が加えるのは、なぜか。ひとつには、次の万葉歌のように、古くは上巳の節句の際に桜の蔓をした歌があるため、桜も桃同様に行事の飾りに用いられた可能性があるであろう。

### 三日守大伴宿祢家持之館宴歌三首

今日のためと思ひてしめしあしひきの尾上の桜かく咲きにけり（巻十九、四一五一）

奥山のやつをの椿つばらかに今日は暮らさねますらをのとも（四一五二）

唐人も筏浮かべて遊ぶといふ今日ぞ我が背子花蔓せな（四一五三）

併せて考えられるのは、次に傍線で示すように『枕草子』における伊周の桜直衣姿の描写である。

おもしろく咲きたる桜を長く折りて、大きな瓶にさしたるこそ、をかしけれ。桜の直衣に出桂して、まらうどにもあれ御せうとの君達（注 伊周ら兄弟）にても、そこ近くゐる物などうち言ひたる、いとをかし。（正月一日は）

高欄のもとに、青き瓶の大なる据ゑて、桜のいみじくおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、高欄の外まで咲きこぼれたる昼つ方、大納言殿（注 伊周のこと）、桜の直衣の少しなよらかなるに：「月も日もかはりゆけども久に経るみむろの山の」といふことをいとゆるらかにうち出だしたまへる、いとをかしうおぼゆるにぞ、げに千歳もあらまほしき御ありさまなるや。」（清涼殿の丑寅の隅）

清少納言にとって、三月の陽気の中、甕に射した桜、伊周らの中閨白家の公達の桜の直姿は、栄花の象徴であった。そして、三月三日、翁まろの頭に柳、桃を飾り、腰に桜の枝を挿させたことについては、次に述べるように奇妙な符号が見出せるのである。

## 五 翁まろと伊周

実は、翁まろに伊周の悲運な生き方を重ねる論が、すでにいくつも見出せる。

塩田良平『日本古典鑑賞講座 枕草子』<sup>(20)</sup>は、「さて、翁丸の悲劇は終わった。まことに喜劇としても馬鹿々々しい喜劇であるが、この喜劇に託して實は作者は内大臣伊周の筑紫流罪のことを暗に諷したのだという説がある……少納言は「枕草子」中そういう、政治の直接的感慨を洩らしているところはないが、あるいはこの段ではそんなことを書きながら思ひ浮

かべていたかもしれない」と、犬の話が暗に伊周の運命を想起させることをいう。

萩谷『枕草子解環』は、さらに「三月三日桃の節句での翁丸の華やかな姿はそのまま、正暦五年二月、積善寺供養の頃の伊周の姿であり、翁丸の犬狩りは、長徳二年五月一日の二条北宮搜索のそれ、満身創痍の翁丸が帰って来て、再び死ぬ程に打擲され、北の陣から引き棄てられたのは、長徳二年十月十日、小二条宅に潜入した伊周が逮捕されて大宰府に領送され、恐らく同月二十余日、母の死を、播磨と備前との国境の山の駅で知った悲劇（第二百二十五段）と符合するものであったと思われる。そして、伊周も翁丸も遂には赦免に遭うのであるが、「人などこそ、人にはれて泣きなどはすれ」と、犬畜生と雖も、人間の心情と全く変りないものを持っていて、詠嘆的に締め括った本段末章の感懐が、言外に、伊周と翁丸とのイメージを重ね合わせている清少納言の心中を傍白したものであろう」と両者を対比させる。

藤本宗利「枕草子日記的章段の沈黙の構造」――「上にさぶらふ御猫は」をめぐって――<sup>(21)</sup>は、「翁丸事件の史実的年次や、追放、赦免という内容の面からも、そこに書かれてはいない中閨白家の衰退と定子の死、それにまつわる道長の専横ぶりの記憶を、読者の脳裏によみがえらせる構図になっている」とし、小森潔「枕草子の祝祭的時空――供儀」としての翁丸<sup>(22)</sup>も、「翁丸は、その身に伊周の罪という具体的な意味を背負

わされて、伊周の罪を浄化する身代わりとしてテクスト枕草子と読者の関係の中に顕現すると考えられるのではないかと述べる。

赤間恵都子『枕草子日記的章段の研究』<sup>(28)</sup>は、「当時の事件を知っている読者が、ましてそれを直接体験している人々が、翁まろ事件から伊周・隆家左遷事件を想起しないことがあるうか。作者が事件について批判しようとまで考えていたかどうか、またそれが出来たかどうか分らないが、せめて事件について書き留めておきたいという思いがあったのは当然のことであり、それは翁まろという一匹の犬によって叶えられたのだ」「執筆時が定子崩御後からどれくらい後のことであつたにしても、女房として宮廷に仕えた筆者が直接天皇を批判する立場にいたとは思えない。当該章段からは、伊周配流の敵命を下した一条天皇こそが定子の唯一の拠り所だったという理不尽な事実、それに対する作者の悲嘆を読み取るのが一杯のところではないだろうか」と慎重に論じる。

斎藤正昭『枕草子連想の文芸—章段構成を考える』<sup>(29)</sup>は、「前段が、中閔日家凋落を象徴する出来事を語り、かつ、その中心人物が伊周入京の密告者「生昌」であることを踏まえるならば、なおさら翁丸に伊周のイメージを重ね合わせるえない。第三期における最初の日記回想的章段となる第五・六段が挿入された背景には、こうした道長方を第一読者とする事情が見え隠れする」と積極的に犬と伊周を重ねる読みを

示した。

実は、犬が猫を追いかけるのと似た場面が『枕草子』内にある。隆家存命のころ、伊周が定子の兄として一条天皇に近く漢詩文を講じていたころのエピソードである。

上の御前の、柱に寄りかからせ給ひて、少し眠らせ給ふを……長女が童の、鶏を捕らへ持て来て、「あしたに里へ持て行かむ」といひて隠し置きたりける、いかがしけむ、犬見つけて追ひければ、廊のまきに逃げ入りて、おそろしう鳴きのしるに、みな人起きなどしぬなり。上も、うちおどろかせ給ひて、「いかでありつる鶏ぞ」など尋ねさせ給ふに、大納言殿の「声、明王の眠りを驚かす」といふことを高ううち出だし給へる、めでたうをかしまに……「いみじき折のことかな」と、上も宮も興ぜさせ給ふ。なほ、かかる事こそめでたけれ。」（大納言殿まゐりたまひて）

犬が鶏を追いかける。驚く帝に対して、伊周はとっさに漢詩の句を朗詠してその場を収める。伊周が大いに称賛される。

宮中で番犬として犬が飼われたり、野良犬が入り込んで「犬狩り」が行われ、「犬島」に放逐することもあったようである。九条家本「延喜式」紙背の寛弘七（一一〇一）年十月三十日附文書に「一升依宣旨、穢供御犬遣淀衛士二人料」とあり、また『如願集』六一五番に、

犬島や中なる淀の渡し守いかなる時に逢ふ瀬ありけん

と詠まれることから、淀の中洲に犬を放逐する島があり、中世初期には地名として認知されていたようである。ただし『枕草子』にいう「犬島」が固有の地名であるとする確かな証はない。また、『十訓抄』上「大江匡衡の字才」（江談抄にも）では、犬が彰子の御帳台の中で子を産む話もある。

犬が帝の面前で猫や鶏を追いかけてまわすことが特殊な場面だったとは言えないが、『枕草子』においては、伊周を絡ませる印象的な場面として描かれていることは留意されよう。

こうした関連性について整理すると、次のようになる。

本稿では、伊周の当該詩の成立時期について検討し、長徳元年三月の詠作である可能性が高いことを指摘した。また、『枕草子』における上巳の節句の描写に注目し、伊周の姿が暗示的に描かれているとする諸説を紹介して、図式化してみた。

『枕草子』には、正暦五（九九四）年中関白家の盛大な花見を振り返り、

（正暦五九九四年）

瓶の桜、桜の直衣（清涼殿の丑寅の隅）

犬が鶏を追ひ、伊周朗吟（大納言殿まゐりたまひて）

←事典

三月三日（正月一日は）

萩谷 → 翁まろ晴れ姿 → 翁まろ事件（上にさぶらふ御猫は）

→ 今浜

長保二一〇〇〇年三月

→ 萩谷・藤本・斎藤など

伊周漢詩

伊周らの流罪

（長徳元九九五年三月か）

（長徳二九九六年）

されど、その折りめでたしと見奉りし御こともども、今の世の御こともどもに見奉り比ぶるに、すべて一つに申すべきにもあらねば、もの憂くて、多かりしこともども、皆とどめつ。（関白殿、二月二十一日に、法興院の）

と、道長の時代になった「今の世」に遠慮して、中関白家の栄華を書かないという執筆態度が見られる。山本淳子『枕草子のたくらみ』は、『枕草子』は、定子亡き後、道長権力のもとで生き延びなくてはならなかった。強固な後ろ盾のない清少納言が個人で書き、世にリリースして、広まるのを待つ。その細々とした営みは作者にとって、事によっては容易に途絶えるものと感じられただろう。だからこそ『枕草子』の中には、道長への直接の恨み言は一言も書かれていない」と、道長サイドの読者を想定した作品のありようを問う。

『枕草子』に描かれる伊周像、伊周の他の詩作の検討など、多くの課題が残るが、後考を俟ちたい。

- (1) 「平安文学研究」一九七〇年六月
- (2) 『本朝麗藻』の本文は大曾根章介・佐伯雅子編『校本本朝麗藻』（汲古書院）に、その他の本文の引用は『新日本古典文学大系』『新編日本古典文学全集』『新編国歌大観』『新釈漢文大系』などによる。『万葉集』の歌番号は旧番号を用いる。
- (3) 後藤昭雄『平安朝漢詩文論考 一条詩壇と『本朝麗藻』』（勉誠出版 二〇〇五年）
- (4) 「芸文研究」一九八六年十二月
- (5) 『講座平安文学論究9輯』風間書房 一九九三年、のち『平安朝和歌漢詩文新考 継承と批判』（風間書房 二〇〇〇年所収）
- (6) 新典社 一九九三年
- (7) 勉誠出版 一九九三年
- (8) 森北書店 一九四三年
- (9) 青蛙房 一九七四年
- (10) 続群書類従完成会 二〇〇〇年
- (11) 「国語と国文学」二〇一五年十二月
- (12) 「香椎鴻」一九六九年九月
- (13) 「国語と国文学」一九三五年五月
- (14) 明治書院 一九五九年
- (15) 浜口俊裕『紫式部日記』敦成皇子御産養七夜について（日本文学研究 二〇一六年二月）は、この記事が敦成御産養の日でなく十二月二十日の百日のことであり、『大鏡』の脚色であると指摘する。すると、敦成誕生直後、道長への謁見はかなわず、疎んじられる中、百日の寿ぎの序題を書いた

ものの、年が明けての呪詛発覚、二月に朝参停止という流れになる。

- (16) 同朋社 一九八一年
- (17) 勉誠出版 二〇〇一年（南海博洋担当部分）
- (18) 明治書院 一九二五年
- (19) 「國學院雑誌」二〇一一年八月、のち『枕草子論究―日記回想段の〈現実〉構成』翰林書房 二〇一四年所収
- (20) 角川書店 一九五八年
- (21) 「常葉国文」一九九一年十一月
- (22) 「日本文学」一九九二年五月、のち『枕草子 逸脱のまなざし』笠間書院 一九九八年所収
- (23) 三省堂 二〇〇九年
- (24) 笠間書院 二〇一六年
- (25) 朝日新聞出版 二〇一七年